

「米国の大統領」

2020年12月28日

米国の大統領が誰であるか、私には関りが無いが、世界に多大な影響を与える人だけに関心を持たざるを得ない。トランプ氏が大統領に選ばれた時から、納得ができないものを感じていた。メキシコとの国境に不法移民や麻薬を阻止する壁を作り、また、アラブ人を皆、危険人物と見なし、更に、女性を蔑視する言動に、人権をないがしろにする危惧を持った。何より、温暖化を止めようとする「パリ協定」の離脱には、将来の世界を託せる人とは思えなかった。大統領に就任してからも、自分の意に反する人を簡単に排除し、気に入らないことを「フェイクニュース」と言って、切り捨てた。

岩波の月刊誌『世界』の1月号は「ポスト・トランプの課題」を特集している。精神科医の村松太郎氏が「ドナルド・トランプの危険な嘘」と題して、寄稿している。村松氏は、トランプ大統領の嘘発言を列挙している。彼は大統領就任式の出席者がアメリカ史上最大であると主張した。実際は、オバマ前大統領のそれよりはるかに少数であった。雑誌『TIME』の表紙に歴史上の誰よりも多く登場したと自慢話のように語った。実際は、彼は11回で、ニクソン氏は55回、登場している。一日に数回も嘘を発表しているのが現実で、メディアは、彼の嘘発言に、配信を中断する処置さえ取っている。村松氏は、トランプ氏の嘘はどれも、直接間接に自分の偉大さ、自分の主張の正当性を訴え、これはナルシシスト（自己愛）の典型的な嘘の特徴に一致している。また精神医学の公式診断に自己愛性パーソナリティ障害というものがあるが、彼は、その診断基準に適合する特徴を持っていると述べている。米国の著名な精神科医や心理学者たちが、「精神科医たちは敢えて告発する」という副題を付けて、『ドナルド・トランプの危険な兆候』を上梓し、ベストセラーになった。専門的な診察をせず、「反社会的パーソナリティ障害」を烙印することは、人権侵害に当たる。しかし、著者の一人、バンディ・リー博士は「彼が危険な人物であることがわかっていて、沈黙を続けるのは、むしろ専門家としての倫理に反する」と記している。

大統領選挙において、バイデン氏が当選したにもかかわらず、敗北を認めようとせず、選挙は不正だと言い募り、幾多の訴訟を起こしたが、ことごとく却下されている。選挙人の投票が各地で行われ、バイデン氏が306人、トランプ氏が232人と、大差がついているのに、政権交代の手続きを遅滞させている。常識では考えられない奇行が罷り通っている。それは、彼が強度のナルシシストであり、また、彼を支持するファンがいるからであろう。これほどの嘘を語る彼が、なぜ支持されるのか。村松氏は、トランプ氏の支持者たちが、彼のナルシシズムを共有しているからだと言う。ヒトラー・ユージェントがヒトラーの中に強い父親像を見ることで、ヒトラーの強権に従った例と通底している。人はナルシシズムを脱し、自己肯定に基づく「自己」を確固と持つことで他者との責任的な関わりを構築できる。トランプ氏の病的なナルシシズムを指摘する村松氏の論考に、深く納得させられた。

「類は友を呼ぶ」という言葉がある。トランプ大統領と安倍晋三前首相は気が合ったようで、理解できる。結果、日米関係は良好になり、米兵器を爆買いすることになった。オバマ前大統領とは気が合わなかったようで、ドイツのメルケル首相とはもっと合わないだろう。私も嘘をつき、自己正当化することがある。しかし、権力を持てば、嘘をつき、何をしても許されるような社会であってはならない。事実を認めず、嘘が通用すると、正常な社会を作れないし、次世代を担う子どもたちの教育ができないのではないか。バイデン氏がどんな政治をするのか分からないが、トランプ氏の退陣は世界に益をもたらす。